

第一章 通俗文学作品と元帥神

1. 通俗文学作品に見える元帥神

元から明にかけての通俗文学作品の多くに元帥神が登場する。これらの作品において幾つかの元帥神は、八仙・玄天上帝・二郎神や哪吒太子などと並び、道教の代表的な神格の一つと見なされている。もっとも、大半の作品ではあまり主要な役割は果たしておらず、むしろ脇役の一つとして登場することが多い。例えば『西遊記』では孫悟空と戦う天将の一部として登場し、『封神演義』では太師聞仲配下の天君として現れる。その役割は、天界の護衛や妖怪討伐の将であることが多い。むろん、『南遊記』のように、元帥神を主役とする小説も存在するが、これは例外的なものと言える。

ここでは、元明の雑劇や『西遊記』『封神演義』『三宝太監西洋記』などの通俗小説を中心に、そこに見られる元帥神の特色について考えてみたい。

2. 『宣和遺事』と『武王伐紂平話』

まず道教や民間信仰との関連で、元代の成立と思われる『宣和遺事』と『武王伐紂平話』の二つの小説について見る。

『宣和遺事』は、また『大宋宣和遺事』とも呼ばれ、『水滸伝』以前の水滸説話を伝えるものとして有名な小説である。その内容は主に北宋徽宗代の歴史故事を描く。その作者や正確な成立年代は不明であるが、恐らく元代の成立であることは間違いないと思われる¹⁾。

『宣和遺事』については、専ら水滸説話との関連から、宋江とその仲間について述べた部分のみが注目されるが、それはこの小説全体からすればむしろ一部分に過ぎない。この小説の主眼は、むしろ徽宗がいかに国を誤って宋をほとんど亡ぼすに至ったか、その過程を描くことにあると言える²⁾。ところで『宣和遺事』の文体は、『宋史』からの転用をはじめ、文言体で書かれる部分が圧倒的に多いが、時に白話体を交える。そして水滸故事を描いた箇

所はほとんど完全に白話体を使用する。このように、文体においてこの小説は著しい不統一を呈する。

さて『宣和遺事』の前集には、張虚靖が関元帥を神将として使役し、蚩尤を退治したという有名な話が見えている³⁾。

徽宗皇帝が言う。

「卿はいかなる神を使われたのか。願わくは朕も見てみたい。また神の労苦を労いたい。」

張継先が答える。

「神は聖駕の起居に従っております。」

すると忽ちのうちに二柱の神が殿前の庭に姿を現した。一人の神は絳衣に金の甲を着け、青巾に美髯という姿。もう一人の神は甲冑を身につけている。張継先は金甲の将を指して言う。

「こちらがすなわち三国蜀の将の関羽にございます。」⁴⁾

この話は『道法会元』⁵⁾の「地祇馘魔関元帥秘法」にも見えており、また『三教搜神大全』の「義勇武安王」の項にも見えている。

また次に王文卿を招いて祈雨の法を行わせたことを記す。この小説で最も重要な役割を果たすのは、林靈素である。しかしながら『宣和遺事』においては林靈素に対して、随所に批判的な言辞が目立つ。

このとき、温州に方士の林靈素なる者がいた。林靈素は始め名を靈壘、字を歳昌といった。その家は貧しかった。遠く遊んで蜀に至り、道術を趙昇に学ぶこと数年にして、妖術をよく行うようになった。そして五雷法をもってその補とした。宿・亮・淮・泗などの各州を往来し、寺にて乞食して食を得ていた。政和三年に京師に至り、東太乙宮に寓居することになった。その時徽宗皇帝は宮中におり、夢を見た。誰か知ろう、その一場の夢こそが、この妖術方士を宮中に引き入れる要因となったのである。⁶⁾

張継先や王文卿に対しては『宣和遺事』では、ほとんど否定的な評価はしていない。それだけに靈素に対する厳しい態度が際だっている。むろんこの林靈素に対する評価は、ほとんど『宋史』における見方を踏襲しただけのものと考えられる。一方で、雷法それ自体にはそれほど悪い評価を与えていない。

宋江らの水滸故事を描くところでは、後に『水滸伝』においても語られる九天玄女の話が見られる程度で、それほど神怪的な要素は見られない。

ただ『宣和遺事』において、水滸の豪傑たちを「天罡院三十六員猛将」⁷⁾と称していることは、もっと注意を払うべきであろう。後に『水滸伝』において天罡三十六星・地煞七十二星という名称が定着するために、「天罡地煞星」が元来の水滸説話にあったものと考えてしまいがちであるが、これは、本来は三十六名の豪傑の説話であったものが、水滸説話が発展し、豪傑の数が百八名になったために作り出されたものである。『宣和遺事』では、この三十六将は星神であるとは言っていない。恐らくこれは、『道法会元』などの道教経典の記載にしばしば見られるような「天罡大聖と三十六将」を指すのであり、その意味からすれば、より古い神体系を反映するものであると考えられる。天罡院の将の人数は、そういう意味からは本来は三十七名でよいことになる。『宣和遺事』においては、宋江を天罡大聖とみなしている可能性も高い。

『武王伐紂平話』は、『封神演義』の源流となった作品で、『三国志平話』などと共に残った元代の『全相平話』五種の一つである。この小説自体は殷周の興亡を描いた歴史小説であるが、中には神怪的な要素が色濃く反映されている。

中でも、殷郊、すなわち殷元帥が物語中で重要な役割を果たすことは重要である。そしてこの説話は、『三教搜神大全』に見える殷元帥の記事と共通する部分が多い⁸⁾。

ある日、紂王の後である姜皇后が太子を産んだ。名を景明王といい、号して殷交（殷郊）といった。これは紂王が泥神を打ったこと

により、天が罰を与えるためにこの者を降したのである。すなわち、この者こそが太歳神であった。⁹⁾

太歳神殷郊が殷の紂王の太子であったこと、その後母を妲己に殺されたことから、紂王に反して周に味方し、紂王や妲己を討ち果たしたとする説話は、『武王伐紂平話』と『三教搜神大全』に共通するものである。ただ『三教搜神大全』では肉球として生じたために、郊外に捨てられ、そのために殷郊という名となったと伝える。『道法会元』にはこの説話に類するものは見えず、また『封神演義』ではこの話は結末を逆にして書き換えられている。

『武王伐紂平話』には、また多くの武神が登場する。殷周が争う戦乱の時代に、天から数多くの凶神が降っているという物語上の設定によるものである¹⁰⁾。

紂王は上奏を聞いて、心中大いに怒る。そして勅命を降して、左將軍の鰥吼に兵五百を率いさせ、太子ならびに胡嵩を追わせる。この者は遊魂神であり、鰥吼は大耗神であった。右將軍の佶留、この者は小耗神であった。紂王はまた四方の門において警備を行わせた。媿鬼と媿歳の二将が任に当たったが、この二人は剣殺の二神であった。¹¹⁾

この他、物語中では白虎神・青龍神・豹尾神・夜霊神などの神が下界に降りていることになっている。これらの神の名は『道法会元』などにも見えるが、所謂元帥神とは些か異なる位置づけである。そもそも、『宣和遺事』においても『武王伐紂平話』においても、関元帥や殷元帥が登場するにもかかわらず元帥神という呼称は使用されない。性格が『武王伐紂平話』に近いと思われる『三国志平話』においては、関羽は「関公」と書かれ、神として扱われていることは間違いのないと思われるが、元帥という位置づけではない。

ただこれらの作品中では、「元帥」という呼称が軍における最高位を現していることが多い。これは「將軍」に比して、やや高い位置であると考えら

れているようだ。この傾向は、元明の雑劇においても顕著である。

3. 『平妖伝』『三宝太監西洋記』における元帥神

『平妖伝』は、北宋王則の乱を描いた神怪小説である。大別して、二十回の羅貫中作と称する『三遂平妖伝』、及び馮夢龍の増補になる四十回の『北宋三遂平妖伝』の二種類が存在する¹²⁾。いずれも明代の成立になるものであるが、二十回本の方は、神怪的な要素こそ濃厚であるものの、登場する神については印象的なものが少ない。それに比べて、四十回本の方は他の小説と共通する神々が多く現れる。元帥に関しては、第十三回に聖姑姑や蛋子和尚などの妖術使いが、雷法を使って神将を使役する段に次のような記載がある¹³⁾。

さて壇を設置した次の日には、まず紙・墨・筆・硯などを六甲壇の下に置く。聖姑姑がまず始めに魁罡の二字を踏み、左手には雷印を、右手には劍訣の印を結ぶ。東方の生氣を吸って、通靈呪を一度唱え、符を一枚焼く。蛋子和尚と左黜は聖姑姑に倣って同じ動作をする。(略) かくのごとく四十九日にして、紙・墨・筆・硯はすべて靈験を持つようになったので、神将を召す相談をする。(略) 聖姑姑が言う。

「まさにそのことをそなたらに話そうとしていたところじゃ。実は内部の神将を整えてはじめて外部の神将を召すことができる。鄧・辛・張・陶・苟・畢・馬・趙・温・関、これが外の神将である。眼・耳・鼻・舌・意・心・肝・肺・脾・腎、これが中の神将じゃ。」¹⁴⁾

雷法と内丹の修養法がここでは密接に結びついており、その意味では『道法会元』巻七十の『玄珠歌』に見える白玉蟾などの説を、別の観点から敷衍したものと言える。ただここで重要なのは、呼び出される神将として「鄧・辛・張・陶・苟・畢・馬・趙・温・関」という十元帥の名が挙げられていることである。鄧天君から畢天君までは雷部の代表的な六天君であり、馬・趙・温・

関は四大元帥とされるものである。明代のこの時点においては、この十元帥を神将の代表的なもののみならず傾向があったことを示す記載であると言える。

また『平妖伝』第十五回では、関元帥について以下のような記載がある¹⁵⁾。

たちまち皇太子の背後から一人の神が出現する。それはどのような姿であったか。臨江仙の歌があつて証となる。

すなわち「眉は臥蠶に似て丹鳳眼、面は重棗の如くして通紅。鋼刀偃月は青龍を舞わせ、戦袍は緑錦を穿つ、美号してこれ髯公とす。一片の丹心日月に懸け、劉を扶け漢を佐け功を成す。神靈千古英風を播く、馘魔上将と称し、護国神通を顕す」と歌う。

この尊神は正にこれ、義勇武安王馘魔上将の関聖であった。そもそも聖天子については百神が加護しており、この日は関聖の番であり、虚空にて聖駕をお守りしていたのであった。¹⁶⁾

ここでは関帝を「義勇武安王馘魔上将」と称していることについては注意すべきであろう。義勇武安王の号については『三教搜神大全』に記載があり、また馘魔上将と称することについては、『道法会元』に記述がある。この記事は、この時期の関帝の称としてこの称号が使われたことを示している。なお、『平妖伝』においては、あまり元帥神という呼称は使用されていない。

『三宝太監西洋記』は、明の羅懋登によって書かれた小説である。明の鄭和の西洋行を題材にしているものの、『西遊記』同様、その内容は神怪的なもので占められている。鄭和の西洋行には、燃灯仏の化身である碧峰長老と、当時の張天師とが付き従っている設定となっているが、元帥神は張天師が使役する神将としてしばしば登場する。『三宝太監西洋記』第十三回には、次のような記載がある¹⁷⁾。

張天師は七七、四十九個の机を並べる。(略) そして剣をかまえ、

罡を踏み、斗を歩み、訣を組み、呪文を唱える。(略) その文句に言う。

「一撃して天門開き、二撃して地戸裂け、三撃して馬・趙・温・関、壇に赴く。」(略)

大音響が鳴り響くところ、四名の天神が中空に出現した。すべて同じ身の丈で、その長さは三十六丈、同じような身体の大きさで、十八かかえほど。その一人目は顔が白く、まるで雪のような白さ。(略) 二人目は黒く、鉄のような黒さ。(略) 三人目は青く、まるで藍のような青さ。(略) 四人目は赤く、血のような赤さ。(略) 顔が白いのは馬元帥で、顔が黒いのは趙元帥で、顔が青いのは温元帥で、顔が赤いのが関元帥であった。この四名の元帥神は、揃って天師に向かって礼を行い、揃って同じ問いを發する。

「天師が命を下して我々をお呼びになったのは、どのような御用のためでございますか。」¹⁸⁾

ここでも呼び出した術者が張天師という高位者ではあるものの、元帥神が使役される存在であることは、『平妖伝』の場合とそう変わりはない。なお、ここではやはり元帥を代表するものとして、温・関・馬・趙の四大元帥が考えられている。その姿も、ほとんど現代におけるこれら元帥の一般的なイメージと異なるところは無い。例えば馬元帥の描写などは、「一に元帥と称し、二には華光と言う。眉の間に三眼が生じて天堂を照らす」と書かれており、完全に一般的な華光神の形象と同じものになっている。

また第四十九回では、同様に張天師が王靈官などを使役する場面がある¹⁹⁾。

言い終わらないうちに、張天師は劍の先において一枚の符を焼く。

そして口の中で呪文を唱え、「来たれ」と叫ぶ。

すると真南の中空から一名の天神が現れる。その顔は赤きこと赤炭のごとく、髪は朱砂に似て、渾身の上下、すべて火が燃えさかるよ

うであった。眼を怒らせ眉がそびえ立ち、手には金鞭を執る。天神は天師の方に向かって礼をして、言う。

「天師が小神を呼び出したるは、何のご命令あつてのことでしょうか。」

天師が目を上げて見ると、それは赤胆忠良の王元帥であった。(略) 天師は急いで何枚もの符を焼く。すると天から何名かの神が現れた。天師が顔を起こして見ると、それは龐・劉・苟・畢の四名の元帥であった。²⁰⁾

すなわちここでは始めに王靈官、次に龐・劉・苟・畢の四天君が現れて、張天師の命令に従うこととなる。

『三宝太監西洋記』の作者である羅懋登は、同時に『三教搜神大全』と同類の書である『搜神記大全』の編者でもある。だが奇妙なことに、『搜神記大全』の方には元帥神の項目がほとんど無い。これは例えば八仙など『三宝太監西洋記』に登場する他の神々についても同様である。恐らく『搜神記大全』と『三宝太監西洋記』では、その編集の方針がそもそも異なっているため、このように差が生じたものであろう。

4. 四大奇書における元帥神

『三国志演義』『水滸伝』『西遊記』『金瓶梅』、すなわち明の四大奇書の記載には、明の小説の中でも比較的古い伝承が反映されているものが多い。

この中で『三国志演義』は、むろん全編にわたって関羽が活躍するわけであるから、関元帥についての重要な資料であると言える。ただ、『三国志演義』には神怪的な要素が少ないため、実際には元帥神に関連する記載はあまり無い。関羽はこの書の中では、「関公」と呼ばれ、一貫して神としての扱いを受けているのが特徴的である。

これに比して、神怪小説である『西遊記』には、元帥に関する豊富な記載が残されている。もっとも、『西遊記』では猪八戒が天蓬元帥の下凡とされているため、まず元帥神の中でも天蓬元帥に関する記載が圧倒的に多い。

ところで『西遊記』においては、雷部の元帥たちは、何故か四天王の配下にあつて天界の門を守護している場合が多い。すなわち、第四回には次のような記載がある²¹⁾。

孫悟空が太白金星より先に南天門の外に到着し、まさに雲を収めて進もうとすると、突然増長天王が龐・劉・苟・畢・鄧・辛・張・陶の各元帥を率いて前に立ちはだかる。これら大力天丁たちは槍や刀や劍戟をかまえ、天門を塞ぎ、悟空をあえて進ませようとしな
い。²²⁾

ここでは雷部の天君たちは、増長天王の配下にあつて南天門を守護する役目を与えられている。ここで元帥たちを「天丁」と称しているのは注意が必要である。『道法会元』などの多くの経典で、元帥と類似の呼称に「天丁」がある。

『西遊記』においては、反乱を起こした孫悟空を討伐するに際して、托塔李天王・哪吒三太子・二十八宿・巨靈神、それに二郎神などの神々が派遣され、その中心となっているが、四天王や多くの天君たちも天界の神将としては重要な存在である。また、太上老君の八卦炉から逃げ出した悟空を、単身防ぐのは王靈官である²³⁾。

孫悟空は暴れ回って通明殿の内、靈霄殿の外に至る。幸いにそこには佑聖真君の配下である王靈官が番をしていた。王靈官は孫悟空が縦横に暴れるのを見ると、金鞭をもって進み、その前に立ち塞がった。(略)

王靈官と孫悟空はひとかたまりになって戦うが、勝負はつかない。これに先んじて佑聖真君は、雷府に向かって命令書を送り、三十六名の雷部の神将全員を出勤させ、一斉に孫悟空を囲ませた。²⁴⁾

ここで王靈官らを使役する将として、佑聖真君の名が挙げられている。「佑

聖真君」との号を持つ神は複数あるが²⁵⁾、ここでの佑聖は、恐らくは玄天上帝のことを指していると思われる。『西遊記』においては、雷部の神将は、時に四天王の将であり、時に雷声普化天尊の配下であり、また玄天上帝の部下となるが、これは定義が厳密でないのはもとより、幾つかの伝承が複合されているものと考えられる。南天門に龐・劉・苟・畢・鄧・辛・張・陶などの諸天君を配するのは、この他『西遊記』第三十一回・五十五回にも見えている。

この他、広目天王の配下に温・関・馬・趙の四大元帥が置かれるという記載もある。すなわち『西遊記』第五十一回には次のような記載がある²⁶⁾。

孫行者はまっすぐ南天門外に至る。頭を上げてみれば、早速広目天王が出迎え、長揖の礼をして言う。

「孫大聖はどちらにおいでで。」

孫行者は答える。

「ちょっと用事があって玉帝にお目にかからなければならんのだ。おぬしはそこで何をしておるのか。」

広目天王は言う。

「今日はそれがしが南天門を巡視する当番でござる。」

その言葉が終わらぬうちに、また馬・趙・温・関の四大元帥が出てきて、礼をして言う。

「これは孫大聖、お迎えもいたさず失礼しました。まずはお茶でもどうぞ。」²⁷⁾

第五十一回のこの段では、孫行者の要請により、天界の将に下凡している者が無いかどうかを玉帝に調査してもらうこととなる。時に「雷霆の官将」として、「陶・張・辛・鄧・苟・畢・龐・劉」の各天君の名前が挙げられている。この後、哪吒太子と鄧・張天君に孫悟空への加勢が命じられるのであるが、そこでは鄧天君の名前を「鄧化」とし、張天君の名を「張蕃」としていることは注意すべきであると思われる。道教經典の多く、例えば『道法会元』な

どでは、鄧天君は「鄧伯温」、張天君は「張元伯」という名前であるとするのがほとんどである。

なお、広目天王の下に温・関・馬・趙四大元帥がいるとすることは、この他、第五十四回にも見えている。

一方で『西遊記』第八十七回では、孫悟空が雷部の神々を出動させるため、九天雷声普化天尊に願ひ出ることになっている。恐らくこの場合は降雨のことを司るため、本来の役職に則ったものとなったのであろうが、雷部の神々の役割の多面性を示す例と言えよう。なおこの段で呼び出される天君は、「鄧・辛・張・陶」の四名と、それに雷母にあたる「閃電娘子」である。

天界の門を守護する四天王の配下に雷部の元帥が配置されるというのは、『西遊記』に目立った特色であるが、他ではあまりこのような例を見ない。これは四天王の配下に三十二将があり、増長天王の下に韋馱天など八將軍がいる、といった仏教における神将の配列を、そのまま雷部の三十六将に置き換えたものと推察される。

『水滸伝』においては、豪傑たちの形容に、李天王や天蓬元帥などの天界の将の名を挙げる場合が多い。第十三回において楊志と索超が戦う場面に次のような記載がある²⁸⁾。

こちら社稷を扶持する毘沙門托塔李天王のようであり、あちら江山を整頓する掌金闕天蓬大元帥のようである。(略)

かたや巨霊神の憤怒して、大斧を揮って西華山を切り開くがごとく、かたや華光蔵の怒りを生じて、金鎗によって鎖魔関を突き抜くがごとくである。²⁹⁾

ここでは華光すなわち馬元帥の名も挙げられている。同様の記載は、第三十八回の李逵と張順が争う場面にも見える³⁰⁾。

かたや馬霊官の白蛇に托化するがごとく、かたや趙元帥の黒虎に投胎するがごとし。³¹⁾

ここでは馬・趙の二元帥を取りあげている。天蓬元帥や李天王は、『西遊記』においても重要な天界の武将であるが、この後の小説ではむしろあまり目立たない存在となる。

『水滸伝』第七十一回において百八名の豪傑が勢揃いし、齋醮を行う場面があるが、「崔・盧・鄧・竇」の四将の名がそこに見えているのは注意すべきであろう³²⁾。同様の記載は『金瓶梅』にも見えている。すなわち、第三十九回で西門慶が玉皇廟において道士に祭祀を行わせる段に、次のような記述がある³³⁾。

これは早朝開啓にして、無佞太保康元帥と九天靈符監齋使者に請う。齋儀を厳禁ならしめよ。この一枚は、正法馬・趙・温・関の四大元帥と、崔・盧・鄧・竇の四大天君に請う。壇を監し門を監せよ。³⁴⁾

ここでは康元帥や四大元帥の他、崔・盧・鄧・竇といった、他の作品にあまり見られない天将の名が見えている。恐らく『水滸伝』と同様に、当時の儀礼の様子を反映しているものと思われる。

さて、『水滸伝』には、容与堂本などの百回本の他に、田虎・王慶故事が追加された百二十回本がある。この増補部分の故事については、明末の風潮を反映してか、神怪な要素が非常に強くなっている。特に公孫勝と喬道清の法術合戦の部分などにその傾向が顕著に現れている³⁵⁾。この増補部分の登場人物の中で、河北の将である馬霊は、妖術を使い、金磚を使い、風火の二輪に乗り、また戦の時は三眼になるなど、完全に馬元帥を模したものとなっている。そもそも、馬霊なる名前からして「馬霊官」から取ったものであろう。このような武将が登場することは、本来の『水滸伝』の流れからすれば違和感があるが、増補者は、あまり深くは考えなかったようである。これはまた当時馬霊官信仰が盛んであったことの反映であるとも考えられる。

総じて、四大奇書においては、陶・張・辛・鄧・苟・畢・龐・劉の雷部の天君と、温・関・馬・趙の四大元帥が天界の武神の代表的なものと考えられ

ているようだ。ただ、『水滸伝』で「靈官」といえばすぐに馬靈官を指すのに対し、『西遊記』では王靈官を指していることは、その作られた年代の相違を反映するものである可能性が高い。

5. 『四遊記』に見える元帥神

『四遊記』は幾つかの出自の異なる小説をまとめたもので、『八仙東遊記』『北遊記』『南遊記』と、それに節略本の『西遊記』から構成されている。

呉元泰の『八仙東遊記』は、『上洞八仙伝』ともいい、八仙信仰に大きな影響を与えた小説である³⁶⁾。叙述の中心となるのは当然のことながら八仙であるが、物語の終盤に八仙と龍王が争い、玉帝が元帥神を派遣することから、四大元帥が登場する³⁷⁾。

報告を聴いて玉帝は大いに怒り、即座に閻、温の二元帥に対し、天兵二十数万を率いて、空に満ち野を埋めるほどの陣を配し、龍華会に赴いて八仙を捉えるように命じた。また同時に馬、趙の二元帥には、二十万あまりの兵を率いて助勢するように命じた。³⁸⁾

やはりここでも真っ先に討伐のために派遣されるのは、温・閻・馬・趙の四大元帥である。

『南遊記』は、『五顯靈官大帝華光天王伝』とも称し、華光、すなわち馬元帥を主とした小説である³⁹⁾。このような小説が存在すること自体が、明末における馬元帥信仰の隆盛を物語るものであろう。作者は明の余象斗であるが、恐らく先行する何らかの資料に基づき、また『西遊記』や『八仙東遊記』などの内容を踏まえた上でこの小説を書いたものと推察される。

その内容は、もと釈迦如来の弟子であった妙吉祥が罪を得て下凡し、投胎を繰り返しながら、天界や地獄などで大暴れをし、最後には華光天王として天界の武将として封じられるというもので、やや荒唐無稽な話が展開する。この華光の説話は、『三教搜神大全』の馬元帥の話とよく似ており、恐らくは同源の説話に取材しているものと考えられる。またそれは亡失した戯曲

『華光顯聖』にも共通するものであり、可能性としては『華光顯聖』劇の説話を『三教搜神大全』馬元帥の項目と『南遊記』が共に引き継いでいるものと思われる⁴⁰⁾。

『南遊記』は馬元帥を主とするものであるから、当然のことながら、元帥神に関する豊富な記載が見られる。ここでの華光の姿は、三眼で、火の化身であり、金磚と火鎗を武器とし、風火輪に乗るといものである。

ところで『南遊記』では、雷部の三十六元帥は完全に玄天上帝の配下であると考えられている⁴¹⁾。

華光は逃げて天界の北方の地に来る。ここはすなわち、玄天上帝が守護する場所であった。華光は玄天上帝を一目見るや、話をしようともせず、いきなり手の金磚で打ちかかった。玄天上帝は手に持っていた七星黄旗を使って、金磚を巻き取ってしまう。(略)華光は身体を全く動かすことができず、泣いて玄天上帝に懇願する。

「わたしは鄧化に陥れられてこのような事態になったので、やむを得なかったのです。今日こうして玄天上帝さまに捉えられた以上、慈悲心をおこしていただき、助けていただけませぬか。」

玄天上帝は言う。

「そなたが本当に邪悪な行いを改めて正に帰すというならば、許してやらぬでもない。わしの部下はいま三十五名の大将がおる。そなたがわしに帰順するというなら、すべてで三十六名となる。」⁴²⁾

これと同じような考え方は、同じ余象斗撰の『北遊記』にも見えるが、『四遊記』の中でも『八仙東遊記』や『西遊記』においては明確には示されていない。恐らく明末のこの時期における玄天上帝信仰の隆盛と無縁ではないと考えられる。

なおこの物語では、鄧天君は悪役に近い形で登場し、その名を「鄧化」とする。これは『西遊記』などと同様である。恐らく民間においては、鄧天君の名は鄧化であるという伝承があったものと推察される。

『南遊記』では後半部において、地獄に落ちた母親のために酆都へ赴くところがあるが、ここで酆都の番人として登場するのは関元帥と韓元帥である。これにより、関元帥が酆都すなわち地獄と縁の深い神であるという考えがまだ残っていることが分かる。ところで、ここに「韓元帥」とある元帥神は、ほとんど『道法会元』などにも記載が無いものである。

『北遊記』は、『北方真武祖師玄天上帝出身全伝』と称するように、玄天上帝が中心となった小説である⁴³⁾。なお『南遊記』と『北遊記』については、それぞれ南方と北方に縁の深い神が関わるというだけであり、『西遊記』と異なり、物語中に旅などが設定されているわけではない。

『北遊記』では、前半が玄天上帝の出身伝に当てられているものの、後半は三十六元帥を玄天上帝が配下に収めていく過程を描く。そのため、元帥神に関する記述はかなり多い。

まず巻二の「祖師下凡収黒氣」の段では、趙公明すなわち趙元帥を服す⁴⁴⁾。

玄天上帝が言う。

「この黒氣はどうしてこのように集まっているのですか。」

三清のうち、上清が答えて言う。

「この気はすなわち、黒煞神が世にあって乱をなしているために起こったものじゃ。黒煞神は黒面大王と号し、その手下には七名の将がいる。一人目は名を李便といい、二人目は白起、三人目は劉達、四人目は張元伯、五人目は鍾士貴、六人目は史文恭、七人目は范巨卿。そして黒煞神は姓を趙といい、名は公明という。文明とも号しておる。」⁴⁵⁾

この記述は幾つかの点で興味深い。すなわち、瘟神として趙公明と共であった鍾士貴などの将の名が見えること、また張元伯の名や、『道法会元』「正一玄壇趙元帥秘法」において趙公明の部下とされる白起などの名も見えている。またここでは、黒煞神と趙公明を完全に混同している。

卷三の「祖師遇着金刀難」では、関羽の刀が精となっているのを、関羽の力を借りて服するという説話が語られる。その功績によって玉帝は関羽を関元帥に封ずる⁴⁶⁾。

玉帝の勅旨が至る。それによれば、関羽を崇寧王道太真君・朗靈関元帥の職に封ず。日中は天門を守護し、夜は酆都地獄を管理する。世を巡察するに当たっては、左手に金烈沙刀を執り、右手に紫微大帝の勅印を執り、左足には一播神を踏み、右足には一火車を踏み、玄天上帝を補佐して魔を降すよう。⁴⁷⁾

ここでの関元帥は、『西遊記』に見られたような天の門を管理する性格と、『道法会元』に見られるような酆都治獄の管理の性格とを併せ持つように設定されている。恐らく幾つかの伝承を折衷させた結果、このような神格になったのであろう。関元帥に限らず、『北遊記』や『南遊記』における元帥神は、その多くが幾つかの伝承を統合した結果、かえってその性格が曖昧になってしまっている。なお、ここで関元帥が王靈官の如く火車を踏む形象になっていることは興味深い。

このように多くの元帥神を配下に加えていき、最後には三十六員の元帥がすべて揃うことになる⁴⁸⁾。

万法教主神功妙濟許（遜）真君、海瓊白（玉蟾）真君、果嚴教主濟微伝教祖（舒）元君、洞玄教主辛真君、清微教主魏（華存）元君、混元教主路（時中）真君として封ずる。

趙公明を都掌金輪如意趙元帥に、関羽を顕靈関元帥に、龍興王と田華を苟、畢の二元帥に、亀蛇を水火二将に封ずる。張健を尽忠張元帥に、龐喬を混炁龐元帥に、副応を糾察副元帥に、華光を正一靈官馬元帥に、朱彦夫を管打不信道朱元帥に封ずる。催、盧二將軍の位を与える。李伏龍を先鋒李元帥に、両田を降妖辟邪両元帥に、鄧成、辛江、張安をそれぞれ鄧、辛、張元帥に封ずる。

汪無別、寧世諤はそれぞれ汪、寧二太保に封ずる。劉俊は玉府劉天君に、雷瓊は威靈瘟元帥に、石成は神霄石元帥に、広沢は風輪周元帥に、謝仕榮は火徳謝元帥に封ずる。離婁、師曠は聡明二賢とする。康席は仁聖康元帥に、高員は降生高元帥に、孟山は酆都孟元帥に封ずる。

王鉄、高銅は虎丘王、高二元帥に封ずる。王忠は九州豁洛王元帥に封ずる。雷公は九天霹靂大將軍とし、楊彪は楊元帥に封じ、殷高は地司太歳殷元帥とする。鉄頭を猛烈鉄元帥に、朱佩娘を雷都電母に、朱孛娘を月孛天君に封ずる。⁴⁹⁾

実際には三十六名以上の神が記載されている。この記述も、多くの問題を含んでいる。

まず、冒頭に許遜・白玉蟾・祖舒・魏華存・路時中といった祖師たちの名を挙げている点は注意すべきであろう。これは第三章で後述する通り、『道法会元』などの清微系の文書に多く見られる形である。恐らくはこの記載の元になった資料では、これらの祖師を分けていたはずだが、ここでは封ぜられる元帥たちと区別が無くなってしまっている。どうやら『道法会元』のような、「主法」があり「神将」がいるといった法術の形式の意義は、この時点ではかなり薄くなっているであろう。

元帥の名前であるが、例えば鄧天君は「鄧成」となっている。これは同じ余象斗が作ったはずの『南遊記』の「鄧化」とも異なっている。恐らく余象斗は、『南遊記』と『北遊記』をそれぞれ別の資料に取材して作成したものであろう。例の「韓元帥」が『北遊記』には登場しないのも、同じ理由によるものと考えられる。

また、ここに見られる三十六元帥の名称については、その鄧天君など一部を除いて、ほとんど『三教搜神大全』に見えている。「温瓊」が「雷瓊」になるなど、若干名の異なる部分もあるが、『三教搜神大全』と『北遊記』では、ほぼ一致する。もともと三十六元帥といった場合は、その数が多いこともあって、人員の変動も激しい。玄天上帝の他に、保生大帝もその部下に三十六

元帥を置くという。幾つかの資料で挙げる「三十六元帥」とは、次のような人員である⁵⁰⁾。

蔣光、鍾英、金游、殷郊、鄧郁光、辛漢臣、張元伯、陶元信、龐煜、劉吉、苟雷吉、畢宗遠、趙公明、閔羽、馬勝、温瓊、王善、康応、朱彦、呉明遠、李青天、梅天順、熊光顯、高克、石遠信、孔雷結、陳元遠、林大華、周青遠、紀雷剛、崔志旭、江飛捷、賀天祥、呂魁、方角、耿通

この中の鄧・辛・張・陶天君や、温・閔・馬・趙などの著名な元帥は一致するが、他はあまり共通性が無い。これは後述する『封神演義』の二十四天君なども同様である。なお、ここには『道法会元』に見られた神将の名が幾つか見える。

しかし、『三教搜神大全』と『北遊記』では、人員及び名称の一致する率がかなり高い。これは恐らく、余象斗の基づいた資料の中に『三教搜神大全』があったためであると推察される。むろん、神の名や説話の不一致など、それだけでは片づけられない問題も多いが、少なくとも『三教搜神大全』に類した書を見ていたことは間違いないと思われる。以下に、『三教搜神大全』と『北遊記』の元帥についての対照表を掲げる。

『三教搜神大全』	『北遊記』
太歳殷元帥・殷郊	太歳殷元帥・殷高
	鄧元帥・鄧成
辛興苟元帥	辛元帥・辛江・苟元帥・新興王
張元帥・張純	張元帥・張安
混炁龐元帥・龐喬	混炁龐元帥・龐喬
劉天君・劉後	玉府劉天君・劉俊
田華畢元帥・田華	畢元帥・田華
趙元帥・趙公明	金輪如意趙元帥・趙公明

義勇武安王・関羽	顕霊関元帥・関羽
霊官馬元帥	正一霊官馬元帥・華光
孚祐温元帥・温瓊	瘟元帥・雷瓊
王元帥・王悪	九州豁洛王元帥・王忠
康元帥	仁聖康元帥・康席
朱元帥・朱彦矢	朱元帥・朱彦夫
高元帥	降生高元帥・高元帥
石元帥	神霄石元帥・石成
	風輪周元帥・広沢
田呂元帥・呂雨	
謝天君・謝仕栄	火徳謝元帥・謝仕栄
李元帥・李封	李元帥・李伏龍
王高二元帥・王鉄・高銅	王元帥・王鉄・高元帥・高銅
党元帥	党元帥・党婦藉
副応元帥	糾察副元帥・副応
楊元帥・楊彪	楊元帥・楊彪
鉄元帥	猛烈鉄元帥・鉄頭
斬鬼張真君・張巡	尽忠張元帥・張健
風火院田元帥	田元帥・田乖
孟元帥・孟山	鄭都孟元帥・孟山
	雷都電母・朱佩娘
	催盧將軍
	両元帥・両田
	汪太保・汪無別
	寧太保・寧世誇

6. 『封神演義』の二十四天君及び他小説に見える元帥神

『封神演義』は『西遊記』と並び、明の代表的な神怪小説であり、芝居や講談を通じて民間信仰に与えた影響は非常に大きなものがある。

ただ一方で『封神演義』はその影響力から、かえって民間信仰の説話をねじ曲げることがあったことも事実である。例えば、『三教搜神大全』を見れ

ば、趙元帥は秦の時代の人であると書いてあるにもかかわらず、『封神演義』に登場することから、これを殷周代の人と考えてしまうこととなった。また哪吒太子も、本来は唐以後に中国で信仰が盛んになった仏教神であるにもかかわらず、『封神演義』で活躍するために、これを周代の人物と考えるようになった。このような例は、『封神演義』に関しては枚挙にいとまがない⁵¹⁾。

元帥神に関しては、殷元帥や趙元帥が『封神演義』では非常に目立つ存在となっている。しかしいずれも截教側に味方し、非業の最期を遂げることになってしまった。これに限らず、『封神演義』においては、説話の書き換えがかなり恣意的になされている。

雷部の天君に関して、『封神演義』ではこれを明確に雷声普化天尊（聞仲）の配下とする。『封神演義』には玄天上帝が登場せず、また作者は時に過剰に道教経典を意識するため、このような配置になったものと考えられる。また雷部の神は三十六元帥ではなく、二十四天君とされている。その二十四天君については次の通りである⁵²⁾。

鄧天君忠
辛天君環
張天君節
陶天君榮
龐天君洪
劉天君甫
苟天君章
畢天君環
秦天君完
趙天君江
董天君全
袁天君角
李天君徳
孫天君良

栢天君礼
 王天君変
 姚天君賓
 張天君紹
 黄天君庚
 金天君素
 吉天君立
 余天君慶
 閃電神（即金光聖母）
 助風神（即菡芝仙）

ここに始めに名が挙げられている鄧・辛・張・陶・龐・劉・苟・畢の諸天君については、これまでの多くの資料に名が見えるもので問題は無い。しかし、秦天君から余天君までと、金光聖母などは、どのような資料に基づいているのか不明である。諸天君の中には、『道法会元』の中に見える姓の者もいるが、鄧天君を「鄧忠」とするなど、名自体を書き換えてしまっているので、確認しにくい。

『封神演義』において、雷部の神がこの二十四天君とされてしまったことの影響は大きく、現在行われている儀礼の中にも、この説をそのまま援用している場合が多い。例えば、貴州省徳江県の儺戯の儀礼文書では、まさにこの二十四天君が登場する⁵³⁾。

元帥神についての記載は、その他の小説においても随所に見えている。

『警世通言』巻十五の「金令史美婢酬秀童」では、まず挿話として、蘇州玄都觀の道士張皮雀の話を引き⁵⁴⁾。

張皮雀は玄都觀にあること五十余年であった。（略）

皮雀は呵呵大笑したために、雷部の天将の怒りに触れ、雷に打たれて死んだ。後にある人が徽州の商家にて扶鸞を行ったところ、皮雀が降った。その自ら言うに、「わしはもと天上の苟元帥であった。

俗界の縁がすでに満ちたので、雷部の他の將に請われて天に戻り、
將班に帰ったというわけじゃ。」⁵⁵⁾

この話は幾つかの点で興味深い。まず蘇州の玄都觀、すなわち玄妙觀において雷法が盛んに行われていたこと⁵⁶⁾、次に苟元帥がこのように下凡する存在として考えられていたこと、また当時扶乩が行われ、そこに雷部の神が姿を現すことがあったことなどである。苟元帥が登場するのも興味深い。

明代にはまた道教の教えを小説で宣揚しようとした一連の作品群がある。鄧志謨の『飛劍記』『呪棗記』『鉄樹記』などである⁵⁷⁾。このうち、『飛劍記』は呂洞賓を中心にその故事を描いたもの、『呪棗記』は薩真人と王靈官の説話を説いたもの、『鉄樹記』は許真君の龍退治の話を中心としたものである。

ただ『呪棗記』は王靈官の話が大きいとはいえ、あまり元帥そのものに関する説話は見えない。この小説は、後半部の地獄の様相を描くところに異様に力を注ぐ。恐らくは人に向かって悪行を行わぬようにしむけるのが目的であったと思われる。

王靈官は、ここでは始めは悪行を行う霊であったものが、薩真人によって調伏され、法を守る善神になったとされる。始め王悪という名であったものが、王善と改めたとも記される。この話自体は、ほぼ同じものが『三教搜神大全』の「薩真人」の項目と『北遊記』の中にも見えている。

なお、『楊家府演義』にも、楊家將の面々が元帥神に扮して陣を破るという記述が見える⁵⁸⁾。

孟良装関元帥、焦贛扮殷元帥、岳勝扮趙元帥、張蓋扮温元帥、劉超扮馬元帥。

ここで名が見えるのは、関元帥・殷元帥・趙元帥・温元帥・馬元帥である。すなわち、四大元帥に殷元帥を加えた配置となっている。

7. 元明の雑劇に見える元帥神

元明代の雑劇の中にも元帥神はよく登場する。ここでは、『元曲選』『孤本元明雑劇』などの資料に見える元帥神について見てみたい。

元帥神が登場するのは雑劇の中でも、神仙や道士などが妖怪や魔物などを退治する「驅邪劇」であることが多い。ここでの元帥神は、『平妖伝』や『三宝太監西洋記』と同様に、神仙などに使役される性格を持つ。

例えば、雑劇『薩真人夜断碧桃花』では、張珪という人物が、状元に及第した息子に取り憑いた妖精の件で悩み、その依頼を受けた薩真人が、五雷法を駆使して妖魔を退治するという劇である⁵⁹⁾。

われは太上老君の急急如律令を奉るなり。一たび撃てば天清く、二たび撃てば地霊たり、三たび撃てば五雷至る。速かに真の姿を現せ。(略)老君は我に驅邪の劍を賜う。(略)わが持つこの水は凡水にあらず、九龍が吐き出して天地を浄めしものなり。⁶⁰⁾

ここで直符使者が現れ、そして命を伝えたあと、温・関・馬・趙の四大元帥が登場する。すなわちこの劇においても、驅邪の神将としては四大元帥をその代表と見なしていたと考えられる。

また雑劇『太乙仙夜断桃符記』⁶¹⁾の第四折では、法術の使用場面で太乙仙がほとんど同じ呪文を使って五雷法を駆使する。そしてその場面に見られる神の名は、次の通りである。

上界元始天尊
 三清四帝
 五師六神
 侍香金童
 伝言玉女
 南斗六星
 北斗七星

東斗五星
 西斗四星
 十二宮辰
 二十八宿星君
 雷公電母
 風伯雨師
 雷霆大將
 主行利兵
 鄧・辛・張・陶四大元帥
 龐・劉・苟・畢四大元帥
 神霄雷符馬元帥
 金輪如意趙元帥
 神霄無拘溫元帥
 馘魔上將関元帥
 本壇摂令城隍
 土地等神

やはり雷部の神将として考えられているものは、鄧・辛・張・陶・龐・劉・苟・畢と、温・関・馬・趙の各元帥であることが分かる。『時真人四聖鎖白猿』⁶²⁾でも、驅邪の中心となるのは、温・関・馬・趙の四大元帥である。なお、『辺洞玄慕道昇仙』⁶³⁾では、鍾離権・呂洞賓の二仙と四大元帥が共に登場する。

ただこれらの雑劇に見られる神将の体系は、時に明の小説に見られるものと、若干性格や人員において異なる面もある。例えば、多くの雑劇においては、『道法会元』などに見られる「北極驅邪院」を非常に重視し、その主帥である驅邪院主を神将の元締めと見なす。『二郎神醉射鎖魔鏡』⁶⁴⁾『二郎神鎖齊天大聖』⁶⁵⁾『灌口二郎斬健蛟』⁶⁶⁾などにおいて、その傾向が特に顕著である。『二郎神鎖齊天大聖』においては、以下の記述のように、「北極驅邪院主は玄天上帝である」と明確に示されるが、その他の資料では若干曖昧な点

もある。

駆邪院主は言う。

「(略) 父は浄楽国王、母は善勝婦人。胎内にあること十四ヶ月、すなわち太上老君の八十二番目の変化、母の左脇から生じた。(略) 玉帝は貧道の功績あるを称え、勅して九天採訪遊奕使・北極鎮天真武玉虚師相玄天元聖仁威上帝に封じ、北極駆邪院都教主とした。」⁶⁷⁾

駆邪院主の命により派遣される神将は、二郎神趙昱と梅山七聖・哪吒三太子などの他、巨霊神、天丁神などがある。「天丁」の称号も『道法会元』に見えているが、「霊官」と同様に、武神の一種として考えるべきであろう。

『二郎神醉射鎖魔鏡』劇は、二郎神と哪吒太子が中心となる話である。二郎と哪吒の両神が宴会のさなか、誤って天界の宝物である鎖魔鏡を壊してしまうことから、その鏡に縛り付けられていた牛魔王と百眼鬼が逃げ出し、これを北極駆邪院の命により連れ戻す、というものである。この劇で北極駆邪院主の配下として登場するのが韓元帥である。先に見たように、『南遊記』にもこの韓元帥は関元帥の同僚として登場する。むろん『道法会元』には夥しい数の神将が登場することから、姓が韓である元帥もいないわけではない。ただ、この戯曲や『南遊記』での韓元帥がいかなる出自を持つかについては、不明な点が多い。或いは漢初の三傑の一人韓信が元帥神になったものであろうか⁶⁸⁾。

馬元帥華光が活躍する劇も多い。作者不明の『釈迦仏双林坐化』⁶⁹⁾は、釈迦如来が入滅するにあたって邪魔をしようとたくらむ妖怪を、華光が主となって退治する劇である。この劇に登場する神のほとんどは四天王や摩利支天・韋駄天など、仏教系の神であるが、天蓬と天猷の二元帥も活躍する。そして華光は五顯神と千里眼・順風耳を引き連れて登場する。この記載からすると、この劇が書かれた時点では華光と五顯神は別の神と考えられていたようだ。この他、楊景賢の『西遊記雜劇』⁷⁰⁾においても、華光は目立つ存在

である。『宝光殿天真祝万寿』⁷¹⁾では、華光と共に東華帝君・鍾離権・呂洞賓・白玉蟾・王重陽といった神仙も登場する。

『許真人抜宅飛升』⁷²⁾では、許真君の蛟退治を描くが、ここでは天蓬元帥と天丁神が駆邪の役割を担う。

『争玉板八仙過滄海』⁷³⁾は、『八仙東遊記』の元となった戯曲である。この作品に登場するのは太上老君・八仙・齊天大聖・四海龍王、それに三官大帝などであるが、あれほど『八仙東遊記』で活躍する元帥神は、この劇にはほとんど出てこない。

この他、恐らく明代に書かれた慶賀劇と称すべき作品群がある。いずれもストーリー性はほとんど無く、多くの神々が現れてお祝いをするというものであるが、めでたい場などで盛んに上演されたようだ。この一連の作品群には夥しい数の神仙などが登場するが、その神体系は明末の小説に見られたものとかかなり異なっている。ただ、天下太平を意識する劇が多いためか、討伐など血なまぐさい話に関わる元帥神はあまり登場しない。

『西遊記雑劇』の中に見られる神体系は、小説『西遊記』と共通する部分も多いが、全体としてはかなり異なった面があると考えられる。ここで観音菩薩によって指名される、三蔵法師を守護する「十大保官」は以下の通りである⁷⁴⁾。

(観音菩薩が言う)「第一の保官はわたしがつとめましょう。第二の保官は李天王、第三の保官は哪吒三太子、第四の保官は灌口二郎神、第五の保官は九曜星辰、第六の保官は華光天王、第七の保官は木叉行者、第八の保官は韋馱天尊、第九の保官は火龍太子、第十の保官は迴來大権修利にそれぞれお願いしたい。」⁷⁵⁾

仏教系の神がほとんどであるが、二郎や華光や九曜の神々も加わっている。第十の保官である大権修利は、大権修利菩薩、また招宝七郎とも呼ばれる神で、日本では禅宗系の寺院に祀られるものである。この神については第四章において述べる。

なお、ここでの華光は『華光顕聖』などの説話を踏まえているようで、次のように歌う⁷⁶⁾。

玉皇殿の金磚は我がものであり、后土祠の瓊花は我が賞するものである。天宮をさわがせた一場においては、鎗にて四掲帝神を打ち負かし、金磚で八金剛を打ち倒した。多くの神々はただ降参するだけ。⁷⁷⁾

おそらく華光については、こういった説話が民間では一般に広く知られていたものであろう。『水滸伝』にしばしば華光の名が見られるのも、その反映であると思われる。

とはいえ、『西遊記雑劇』では李天王の配下としては二十八宿、雷雲風雨の四将などが見える程度で、華光以外の元帥神はそれほど目立つ存在ではない。ただ、火焰山の段で、水部の諸将が名乗りを上げる場面に、次のような台詞がある⁷⁸⁾。

われは世々東南巽を守護する神、箕水豹の飛簾大將軍である。(略)
われは太乙真人の部下の謝仙火伴、霹靂將軍五雷使者である。(略)
われはすなわち畢星屏翳の神、玄冥先生赤松子これなり。⁷⁹⁾

これは後の『西遊記』に見られる神体系とも、『道法会元』に見られるような体系とも異なるものである。恐らく、まさに変容しつつあった民間信仰の神体系の一過程が反映されたものであろう。

8. 通俗文学作品に登場する元帥神の特色

このように通俗文学作品における元帥を見るに、多くの作品に共通するのは、すでに元帥が天界の代表的な神であると考えられていることである。そしてその人員は、温・関・馬・趙の四大元帥、鄧・辛・張・陶・龐・劉・苟・畢の各天君、それに王靈官でほとんど占められている。中でも『北遊記』

だけは例外的に多くの元帥神を入れるが、これは『三教搜神大全』に基づいているために起こった特殊な現象であると考ええる。ただ『封神演義』の二十四天君は、基づくところがあるとはいえ、作者が恣意的に作り出した面が強い。

現在道観や廟などに見られる元帥の像も、ほとんどは四大元帥か雷部の八天君である。むろん王靈官は、全真教系の道観の前殿に必ずと言ってよいほど配置されている「靈官殿」の主である。例を挙げるなら、北京東嶽廟では温・関・馬・趙の四大元帥を後殿に配し、もと南京朝天宮にあり、現在は上海白雲觀にある明の塑像は、趙元帥・殷元帥・馬元帥・王靈官・岳元帥・温元帥である。蘇州玄妙觀の三清殿にある像は、鄧・辛・張・陶・龐・劉・苟・畢・岳・温・殷・朱の十二天君である⁸⁰⁾。

この中で、岳天君だけはやや系統を異にする。岳元帥は『道法会元』などの道教経典では類似した神格が無い。ただ、東岳大帝の配下とされる十太保の中には「岳太保」が存在する。しかしこれと岳元帥との繋がりについては若干疑念がある。何故なら、恐らくは南宋の武将、岳飛が元帥神とされたものであると考えられるからである。そうであれば他の元帥神と比べて、神祇の列に加わった時期が遅く、『道法会元』などの道教経典には反映されていないものと推察される。ただ現在では、関帝として地位が高くなった関元帥を抜いて、別に四大元帥として温・岳・馬・趙の組み合わせとする例もある。『南遊記』などに見られた韓元帥もそうであるが、民間信仰の側で別に神を作り出したりする場合もあったと考えられる。

もっともこの流れは道教側でもあり、後述するように『無上黄籙大齋立成儀』⁸¹⁾などにおいて、清微派によって神の体系化がなされる中、神将はその数を減じていった。そして民間信仰からの影響もあり、有形無形に元帥神の体系は変化していったのである。

また、次章で検討するが『三教搜神大全』に見られる元帥神の集合は、『無上黄籙大齋立成儀』と、明末の通俗小説における体系の中間に位置するものと考えられる。恐らく『三教搜神大全』の基づいた元帥神の資料には、もっと多くの元帥の伝があったと推察される。その資料の中から、編者が特定の

元帥の伝をピックアップして収録したのであろう。しかし、禪師の伝において見られたのと同様、かなり恣意的な選択が行われたものと考えられる。『搜神広記』には関元帥（義勇武安王）と趙元帥の項目はすでに存在したが、四大元帥として揃えるためには、温元帥と馬元帥の項目は必要であった。さらに龐・劉・苟・畢などの雷部の天君の伝も加えた。しかし何故か鄧天君の伝は漏れた。そしてまた、康元帥や孟元帥などの地祇系の元帥も重要と思われるので採録した。

とはいえ、この作業があまり深い配慮のもとになされた処置で無いのはもちろんである。また元帥神の民間における信仰を正確に反映したものとも言えないであろう。しかし、この作業によって、恐らく当時まきに行われつつあった元帥神の変容の過程が、この『三教搜神大全』には記録されることになったものであろう。

注

- 1) 蕭相愷『宋元小説史』（浙江古籍出版社・1997年）89～90頁。
- 2) 『宋元平話集』（上海古籍出版社・1990年）所収。
- 3) 前掲『宋元平話集』282頁。
- 4) 原文：帝曰、卿用何神、願獲一見、少勞神麻。繼先曰、神即当起居聖駕。忽有二神現於殿庭、一神絳衣金甲、青巾美鬚髯、一神乃介冑之士。繼先指示金甲者曰、此即蜀將閔羽也。
- 5) 『道法会元』（『正統道藏』正一部S. N. 1220）
- 6) 原文：是時温州有方士林靈素、初名靈璽、表字歲昌。家世寒微、遠遊至蜀、学道於趙昇道教載、善能妖術、輔以五雷法、往来宿、亮、淮、泗等州、乞食於諸僧寺。政和三年、至京師、寓居東太乙宮。徽宗在大内、得一箇夢、誰知那一場夢、引得一箇妖術方士的来。
- 7) 前掲『宋元平話集』305頁。
- 8) 前掲『宋元平話集』411頁。
- 9) 原文：有一日、姜皇后降生一太子、名之曰景明王、号為殷交。因王打泥神、天降此人、此人便是太歲也。
- 10) 前掲『宋元平話集』430頁。

- 11) 原文：紂王聞奏、心中大怒、敕令左將軍鰕吼領兵五百、趕太子并胡嵩。此人是遊魂神。鰕吼是大耗神。右將軍信留、此人是小耗神。紂王又教四門都檢点。媿鬼、媿歲、此二人是劍殺二神也。
- 12) 太田辰夫訳『平妖伝』「解説」(『平妖伝』中国古典文学大系・平凡社・1967年) 399頁。
- 13) 『平妖伝』(上海古籍出版社・1996年) 99頁。
- 14) 原文：且說安壇次日、先将各人合用紙墨筆硯等、排於六甲壇下。婆子起首、脚踏魁罡二字、左手雷印、右手劍訣。取東方生氣一口、念通靈呪一遍、焚符一道。蛋子和尚和左黜都依着婆子行事。(略)如此七七四十九日、紙墨筆硯俱盡、然後商議召將。(略)婆子道、正要与你細講。有內將、方可召外將。鄧、辛、張、陶、苟、畢、馬、趙、溫、閔、此外之十將也。眼、耳、鼻、舌、意、心、肝、肺、脾、腎、此內之十將也。
- 15) 前掲『平妖伝』114頁。
- 16) 原文：忽見皇太子背後閃出一尊神道。怎生模樣。有臨江仙為証。眉似臥蠶丹鳳眼、面如重棗通紅。鋼刀偃月舞青龍、戰袍穿綠錦、美号是髯公。一片丹心懸日月、扶劉佐漢成功。神靈千古播英風、誠魔称上將、護国顯神通。這尊神正是義勇武安王誠魔上將閔聖。從來聖天子百神加護、這日正輪着閔聖虚空護駕。
- 17) 羅懋登『三宝太監西洋記通俗演義』(上海古籍出版社・1985年) 167~168頁。
- 18) 原文：天師再上七七四十九張卓兒上去。(略)仗着劍、蹶着罡、步着斗、捻着訣、念着咒(略)喝声道、一擊天門開、二擊地戶裂、三擊馬、趙、溫、閔赴壇。(略)響処吊下了四位天神。同是一樣兒的長、長有三十六丈長、同是一樣兒的大、大有一十八圍。只是第一位生得白白的、白如雪。(略)第二位生得黑黑的、黑如鉄。(略)第三位生得青青的、青如靛。(略)第四位生得赤赤的、赤如血。(略)原来面白的是個馬元帥、面黑的是個趙元帥、面青的是個溫元帥、面赤的是個閔元帥。這四位元帥齊齊的朝着天師打了一個恭、齊齊的問声道、適承道令宣調吾神、不知那廂聽用。
- 19) 前掲『三宝太監西洋記通俗演義』628頁。
- 20) 原文：道猶未了、劍頭上燒了一道飛符。天師口裏喝上一声、到。只見正南上吊下一個天神、臉如赤炭、髮似朱砂、渾身上下、恰如火燎的一樣。睜眉怒眼、手執金鞭。朝着天師打個恭。說道、天師呼喚小神、何方便令。天師起眼一看、原来是個赤胆忠良王元帥。(略)連忙的一連燒了幾道飛符、天上一連吊下了一千天將。天師抬頭一瞧、原来是龐、劉、苟、畢四位元帥。
- 21) 『李卓吾評本西遊記』(上海古籍出版社・1994年) 45頁。
- 22) 原文：先至南天門外。正欲収雲前進、被增長天王領着龐、劉、苟、畢、鄧、辛、

張、陶、一路大力天丁、鎗刀劍戟、攔住天門、不肯放進。

- 23) 前掲『李卓吾評本西遊記』82～83頁。
- 24) 原文：直打到通明殿裡、靈霄殿外。幸有佑聖真君的佐使王靈官直殿、他見大聖縱橫、掣金鞭近前攔住。(略)他兩個關在一處、勝敗未分。早有佑聖真君又差將佐發文到雷府、調三十六員雷將、齊來把大聖困在垓心。
- 25) 例えば『三教源流搜神大全』で「佑聖真君」として挙げられているのは茅盈である。
- 26) 前掲『李卓吾評本西遊記』679頁。
- 27) 原文：直至南天門外。忽抬頭見広目天王当面迎着、長揖道、大聖何往。行者道、有事要見玉帝。你在此何幹。広目道、今日輪該巡視南天門。説未了、又見那馬、趙、温、関四大元帥作札道、大聖、失迎、請待茶。
- 28) 『容与堂本水滸伝』（上海古籍出版社・1988年）178頁。
- 29) 原文：這個是扶持社稷、毘沙門托塔李天王。那個是整頓江山、掌金闕天蓬大元帥。(略)一個似巨靈神忿怒、揮大斧劈碎西華山、一個如華光藏生噴、仗金鎗搦透鎖魔関。
- 30) 前掲『容与堂本水滸伝』555頁。
- 31) 原文：一個是馬靈官白蛇托化、一個是趙元帥黑虎投胎。
- 32) 前掲『容与堂本水滸伝』1040頁。
- 33) 『金瓶梅詞話』（中国図書刊行社・1986年）487頁。
- 34) 原文：此是早朝開啓請無佞太保康元帥、九天靈符監齋使者、嚴禁齋儀。此一張、是請正法馬、趙、温、関四大元帥、崔、盧、鄧、竇四大天君、監臨壇監門。
- 35) 『一百二十回的水滸』（商務印書館・1969年）1493～1498頁。
- 36) 八仙とそれに関連する文学作品については、王漢民『八仙与中国文化』（中国社会科学出版社・2000年）や、拙稿『『八仙東遊記』における過海故事の変容』（『東方学の新視点』五曜書房・2003年）343～368頁参照。
- 37) 『四遊記』（華夏出版社・1994年）54頁。
- 38) 原文：玉帝大怒、即命関、温二將、統領天兵二十余万、漫空布野、望龍華会来擒捉八仙。又命馬、趙二將統兵二十万余助陣。
- 39) 華光神については、黄兆漢「粵劇戲神華光是何方神聖」（『中国神仙研究』台湾学生書局・2001年）49～87頁に詳しい。
- 40) 『華光顯聖』劇については、沈德符『万曆野獲編』の中でふれられている。
- 41) 前掲『四遊記』71～72頁。
- 42) 原文：華光走到北方地界、乃是玄天上帝守把。華光一見上帝、更不答話、丟起金砖打来、玄天上帝用手上七星黄旗、将金砖卷了。(略)華光四肢不能動得、大哭曰、弟子因鄧化所逼、出於無奈、只得如此、今日被上帝捉拿、可發慈悲之心、救我可也。

- 上帝曰、你若肯改邪歸正、我部下前有三十五員大將、你若歸順我、湊成三十六員。
- 43) この小説については、グレイ・シーマンの英訳本があり（Gray Seaman『*Journey to the North*』University of California Press・1987）、そこでは『北遊記』自体、扶乩の影響下に書かれたものだとする（39頁）。しかし内容から見るに、この書は一般の通俗小説とそれほどの差異は無い。道教を宣揚する小説という意味からすれば、後述する『呪囊記』の方がその性格が強いと思われる。むろん『北遊記』の最後部には武当山における信仰の反映があると思われるが、扶乩の影響についてはそれほど深いとは考えにくい。
- 44) 前掲『四遊記』210頁。なお記載の一部を、影印本などを参照して改めている。
- 45) 原文：祖師曰、何乃聚有此氣。上清曰、此氣乃黑煞神在世間作亂。自称黒面大王、手下有七員將。一名李便、二名白起、三名劉達、四名張元伯、五名鍾士貴、六名史文恭、七名范巨卿。煞神自己姓趙、名公明。号作文明。
- 46) 前掲『四遊記』213頁。
- 47) 原文：玉帝旨到、封関羽為崇寧王道太真君朗靈関元帥之職。照旧日把天門、夜管酆都地獄、巡游抄察、左手執金烈沙刀、右手執紫微勒印、左脚一掃神、右脚一火車、助上帝降魔。
- 48) 前掲『四遊記』231～232頁。
- 49) 原文：万法教主神妙功濟許真君、海瓊白真君、果巖教主濟微佉教祖元君、洞玄教主辛真君、清微教主魏元君、混元教主路真君、都掌金輪如意趙元帥、関羽封為顯靈関元帥、龍興王、田華封為苟、畢二元帥、龜、蛇封為水火二將、張健封為尽忠張元帥、龐喬封為混泥龐元帥、副応封為糾察副元帥、正一靈官馬元帥、朱彦夫封為管打不信道朱元帥、催、盧二將軍、李伏龍封先鋒李元帥、両田封降妖辟邪両元帥、鄧成、辛江、張安封為鄧、辛、張元帥、汪無別、寧世誇、封為汪、寧二太保、劉俊封為玉府劉天君、雷瓊封為威靈瘟元帥、石成封為神霄石元帥、広沢封為風輪周元帥、謝仕榮封為火徳謝元帥、離婁、師曠封聰明二賢、康席封為仁聖康元帥、高員封為降生高元帥、孟山封為酆都孟元帥、王鉄、高銅封為虎丘王、高二元帥、王忠封九州豁洛王元帥、雷公封為九天霹靂大將軍、楊彪封為楊元帥、殷高封為地司太歳殷元帥、鉄頭封為猛烈鉄元帥、朱佩娘封為雷都電母、朱李娘為月李天君。
- 50) 馬書田『華夏書神・道教卷』（雲龍出版・1993年）190頁、同様の説は、また『武当神仙大観』（武漢出版社・2000年）64頁などにも見える。
- 51) 『封神演義』の民間信仰に対する影響に関しては、拙著『封神演義の世界』（大修館書店・1998年）参照。
- 52) 『封神演義』（人民文学出版社・1979年）992～993頁。

- 53) 王秋桂・庾修明『貴州省德江県穩坪郷黄土村土家族衝壽儺調査報告』（『民俗曲芸叢書』施合鄭民俗文化基金会・1994年）28頁。
- 54) 馮夢龍『警世通言』（人民文学出版社・1956年）201～202頁。
- 55) 原文：張皮雀在玄都觀五十余年。（略）皮雀呵呵大笑、触了天将之怒、為其所擊而死。後有人於徽商家扶鸞、皮雀降筆、自称、原是天上苟元帥、塵縁已滿、衆將請他上天帰班。
- 56) 蘇州玄妙觀と雷法の関係については、拙論「蘇州玄妙觀の十二天君像について」（『東洋大学中国哲学文学科紀要』第12号・2004年）147～158頁参照。
- 57) いずれも『明代小説輯刊』第一輯第四冊（巴蜀書社・1993年）所収。またこれらの小説については、李豊楙『許遜与薩守堅——鄧志謨道教小説研究——』（台湾学生書局・1997年）において詳細に研究されている。
- 58) 『楊家府演義』（上海古籍出版社・1980年）170頁。
- 59) 臧晋叔『元曲選』（中華書局・1958年）1684頁。
- 60) 原文：吾奉太上老君急急如律令、撰。一擊天清、二擊地靈、三擊五雷。速變真形。（略）老君賜我驅邪劍。（略）我持此水非凡水、九龍吐出淨天地。
- 61) 『孤本元明雜劇』（台湾商務印書館・1977年）第十冊所収。
- 62) 前掲『孤本元明雜劇』第十冊所収。
- 63) 前掲『孤本元明雜劇』第九冊所収。
- 64) 『元曲選外編』（中華書局・1959年）961～970頁。
- 65) 前掲『孤本元明雜劇』第十冊所収。
- 66) 前掲『孤本元明雜劇』第十冊所収。
- 67) 原文：驅邪院主云、（略）父乃淨樂國王、母乃善勝婦人。腹孕一十四月、則太上八十二化、産母左脅降生。（略）玉帝見貧道有功、勅封九天採訪遊奕使、北極鎮天真武玉虚師相玄天元聖仁威上帝、正授北極驅邪院都教主。
- 68) 韓元帥については、漢初の功臣韓信の他、南宋抗金の武将、韓世忠も想定される。いずれも通俗文学の作品中で「韓元帥」と称されることが多く、その来歴からも元帥神の一人と民間信仰上で見なされることは十分あり得る。
- 69) 前掲『孤本元明雜劇』第九冊所収。
- 70) 前掲『元曲選外編』633～694頁。
- 71) 前掲『孤本元明雜劇』第十冊所収。
- 72) 前掲『孤本元明雜劇』第九冊所収。
- 73) 前掲『孤本元明雜劇』第十冊所収。
- 74) 前掲『元曲選外編』652頁。

- 75) 原文：第一箇保官是老僧、第二箇保官李天王、第三箇保官那吒三太子、第四箇保官灌口二郎、第五保官九曜星辰、第六箇保官華光天王、第七箇保官木叉行者、第八箇保官韋馱天尊、第九箇保官火龍太子、第十箇保官迴來大權修利。
- 76) 前掲『元曲選外編』653頁。
- 77) 原文：玉皇殿金磚是我藏、后土祠瓊花是我賞。炒鬧天宮這一場、鎗撞番四揭帝、磚打倒八金剛、衆神祇索納降。
- 78) 前掲『元曲選外編』684頁。
- 79) 原文：吾世守東南巽二之神、箕水豹飛簾大將軍是也。(略) 吾太乙真人部下謝仙火伴、霹靂將軍五雷使者也。(略) 吾乃畢星屏翳之神、玄冥先生赤松子是也。
- 80) 拙論「蘇州玄妙觀の十二天君像について」(『東洋大学中国哲学文学科紀要』第12号・2004年) 147～158頁参照。
- 81) 『無上黄籙大齋立成儀』(『正統道藏』洞玄部S. N. 508)